

神戸在住レコードコレクター 辻山幸一氏への聞き書き

—その4「義太夫」を語る—

飯塚恵理人 大山範子 辻山幸一

一 「義太夫SPレコード音源を聴く会」 の開催

神戸在住のSPレコードコレクター辻山幸一氏は、謡曲、歌舞伎、新派劇、新内、落語など古典芸能全般のSPレコードの質の高いコレクション（以下「辻山コレクション」）を所蔵しておられる。飯塚・大山が所属している「メディアと古典芸能研究会」では科学研究費、放送文化基金、高橋信三記念放送文化振興基金などの公的・民間助成金を得て、この辻山コレクションをジャンルごとにデジタル化し、著作権・隣接著作権の消滅している音源については、飯塚の研究室ホームページ「恵理人の小屋」から配信している。（<https://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/index.html>）義太夫のSPレコード音源は「辻山幸一コレクション 義太夫」のページである。（<https://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/tujigidayuu.html>）

辻山氏は終戦後の神戸でレコード収集されておられたので、多くがNHK大阪放送局（BK）管内で販売されていたレコードであるという特徴がある。義太夫は関西が本場であり、現在も国立文楽劇場は大阪にある。義太夫のSPレコードも関西で多く出回ったと考えられる。

しかし明治から戦前にかけて関西から東京に拠点を移したり、関西を拠点にしつつも東京のレコード会社で録音、制作したレコードを全国販売して人気を得た義太夫実演家もいたので、関西以外の地域に出回った義太夫のレコードもあったは

ずである。実際、飯塚の手元にある相山女学園大学の卒業生から寄贈を受けた義太夫のSPレコードの中には、辻山コレクションにはないレコードがある。その中で貴重な音源と認められるものについては助成金を載いてデジタル化し、著作権の消滅した音源については「思い出公会堂」（<https://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/koukaidou1.htm>）や、「飯塚研究室レコード」（<https://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/kenreco1.html>）のページより配信している。卒業生の方々から譲って戴いたSPレコードの多くは、戦前から戦後にかけて名古屋の実家で聴かれていた、すなわちNHK名古屋放送局（CK）管内で販売されていたものである。

「メディアと古典芸能研究会」では神戸女子大学古典芸能研究センターを会場に、これまで数回、一般の方々と交えて辻山コレクションの音源を聴く研究会を開催し、ジャンルごとにまとめた小論を出してきた。¹⁻⁴⁾ この3年間はコロナウィルス感染防止の為、研究会は開催できなかったが、2023年になり規制が緩和されたので、3月17日午後2時より古典芸能研究センターにて、辻山コレクションと飯塚研究室所蔵の義太夫音源を聴いていただき、各音源や演者について辻山氏に語っていただく研究会を開催した。今回の研究会ではいずれも著作権が消滅していて飯塚研究室ホームページより配信しているものを対象とした。聴取可の音源データを一覧リストにして、辻山氏が関西の

芸の特徴がよく出ているものを選び、試聴した。

戦後の義太夫には実際の舞台を聴きに行くファンだけでなく、レコードやラジオというメディアを通じて楽しんだファンもかなり多かった。レコードコレクターがどのような魅力を芸に感じ、どのような基準で購入するレコードを選んでいたのかは、近代の芸能史を考える上で重要なポイントであると思う。

二 義太夫について

義太夫（節）とは人形芝居の伴奏として、太棹の三味線と太夫による語りとからなる浄瑠璃の一種である。関西発祥の義太夫を伴う人形芝居を「文楽」と呼んでいる。その発祥は江戸時代に遡り、『日本古典芸能大辞典』の「義太夫節」⁵⁾の解説によると、「【沿革】貞享元年（一六八四）義太夫が大阪道頓堀に竹本座を創立した時を義太夫節の発祥とする。（中略）文化・文政（一八〇四―一八三〇）以来の植村文楽軒の芝居が文楽として今日その伝統を保っている。（中略）浄瑠璃には多くの名人を出し、語り方に精緻な技巧が工夫され、各太夫の芸風を今日に残している。江戸後期から明治・大正にかけては、女義太夫や素人浄瑠璃にも全国的な繁栄を誇った」とある。辻山コレクションの義太夫レコードは、大阪の文楽のレコードであり、大正期までの機械式吹込みのレコードと昭和期の電気吹込みのレコードの両方を含む、ほぼ50年の期間内に作られたレコードをまんべんなく集めておられる。当時、大阪で活躍した多数の太夫の声が残されている貴重なものである。

三 音源とコメント

研究会当日に聴いていただいた音源と、それに対するコメントを以下に挙げた。

音源は、①音源のあるホームページ（「辻」は『恵理人の小屋』辻山コレクション 義太夫、「思」は『恵理人の小屋』思出公会堂、「飯」は『恵

理人の小屋』飯塚研究室所蔵SPレコード」を表す）、②音源名、③演者名、④盤の発売元、⑤盤の番号（分かれば片面か両面かも）で示した。音源の後には、★を付けて演奏者についての注を付けた。コメントは当日の雰囲気が伝わるように会話文のままとし、文意が分かりやすくなるように適時（）で語を補った。

1 辻「義士銘々傳 源左衛門内之段3」、竹本弥太夫・豊沢源吉、ニッポンノホン、3100

★竹本弥太夫：おそらく六世。「一八六六（慶応二）大阪―一九二四（大正一三）・六・六 五世弥太夫門弟。前名長子太夫。大正期の名人。」⁶⁾

〈コメント〉

辻山：竹本弥太夫と豊沢源吉の組み合わせは悪くはないけれど、芸の上ではやはり当時の最高とは言い難く、二番手、三番手とみるのが良いと思う。（戦前の文楽太夫の最高位「櫓下」と呼ばれる人は）摂津大掾・竹本津太夫・豊竹山城少掾（古鞆太夫）と続いて、その時代から「近代浄瑠璃」となった。それまでは師匠から直接教えてもらった通りの語りを次に伝えていった。津太夫などはかなり心理描写より、声にまかせている部分がある。山城少掾あたりから曲節なども従来と変えて情感を入れて語るようになったのでは、と集めたレコードを聴くと感じる。

飯塚：これはニッポンホンだから明治くらいですか？

辻山：明治だね。この当時はまだ（大阪の）船場にある文楽座の他に、人形浄瑠璃の座があった。例えば大隅太夫はその文楽座ではない小屋の浄瑠璃語りであった。遊郭のあった松島のあたりにあった小屋もそれで、そういう芸が当時受けていたのではないかな。そういう座は広く地方巡業をしていた。「谷崎潤一郎の小説に『田んぼの中に丸太小屋を建てて、そこに人形浄瑠璃がかかっている』という文章がある。谷崎は、実際にそういう

座を見て参考にしたのではと思われる。それが地方を回る人形浄瑠璃の座の最後あたりではないか」ということを述べた文章を見たことがある。関西の地方には素朴な人形浄瑠璃が古くから深く根付いているところがあって、私も親の仕事を手伝っていた頃、淡路島の工場の落成祝で出かけた時、地元の老人が舞台上で手作りの「爪人形」をやったり、三味線で浄瑠璃を次々に謡うのを見たことがある。

飯塚：昔、岡崎の十三夜講や二十三夜講と言う女人講を調査したことがあるが、皆、村の「お師匠さん」に習った浄瑠璃を謡っていた。1980年代頃までは、歌謡曲ではなく浄瑠璃を謡って楽しんでた人が地方にはいました。

2 辻「絵本太功記 十段目」、染太夫・広作、コロンビア、2804、片面

★竹本染太夫：九世か？「一八五三（嘉永六）香川——一九一六（大正五）・二・一七 四世住太夫門弟。初名登勢太夫。一八九七年（明治三〇）九世襲名。一九一三年（大正二）隠退」⁷⁾

★豊沢広作：三世広作、後の六世豊沢広助か？「一八四二（天保一三）・一・一大坂——一九二四（大正一三）・三・一九同地 本名岩崎治助。五世の門弟。猿二郎、竜助、仙糸、助八、三世広作を経て、一九〇五年（明治三八）六世襲名。晩年の竹本摂津大掾の相三味線をつとめ、二二年（大正一一）名庭弦阿弥の名を近衛家から受ける。松屋町の師匠と呼ばれ、当時の義太夫節界の目付役として恐れられた。」⁸⁾

〈コメント〉

辻山：これは片面版なので、明治35年から明治末年の極初期のSPレコードと思われる。十段目の十次郎の出陣の用意を語る場面である。染太夫は浄瑠璃として崩れていない本格的な古格の語りをしていると感じる。

3 思「近頃河原達引 堀川猿回し」、大隈太夫・仙之助団平、ニッポンノホン、30、31

★竹本大隅太夫：このレコードは機械式吹込みのニッポノホンと思われるので、年代的に三世と考えられる。「一八五四（安政一）大阪——一九一三（大正二）・七・三一台湾 五世春太夫門弟。初名春子太夫。一八八四年（明治一七）に三世襲名。豊沢団平の指導を受け、団平とのコンビで「壺坂」が大当たりした。おもに彦六座系の芝居で活躍。摂津大掾とともに明治義太夫界の双璧をなしたが、難声で写実的な語り口の芸風は摂津大掾とは対照的であった」⁹⁾

★豊沢団平：二世。「一八二八（文政一一）播州加古川——一八九八（明治三一）・四・一本名加古仁兵衛、二世千賀太夫の養子。三世広助の門弟。（中略）七二年（明治五）から文楽座の中心人物の一人として活躍し、二世竹本越路太夫（のちの摂津大掾）を育てた。八四年から彦六座に移り、三世竹本大隅太夫を育てた。（後略）」¹⁰⁾

〈コメント〉

辻山：大隅太夫は師匠に仕込まれた習ったものを忠実に伝える本格的な芸をしていたことが分かる名盤だ。

4 辻「生写朝顔日記 宿屋」、竹本春子太夫・豊沢新左衛門、ビクター、50007A、50007B

★竹本春子太夫：二世。「一八六七（慶応三）・二・九大坂——一九二八（昭和三）・五・五 本名福井清吉。三世大隅太夫門弟。師や同門の伊達太夫（六世土佐太夫）とともに堀江座に出座し、文楽座に対抗した。相三味線の豊沢新左衛門の協力を得て、春子節といわれる節回しで悪声をカバーし評判をとった。」¹¹⁾

★豊沢新左衛門：二世。「一八六七（慶応三）・五・二三大坂——一九四三（昭和一八）・三・

二四 本名林覚之助。豊沢松太郎門弟。初名豊沢松吉。一八八八年（明治二一）豊沢松三郎と改名し、九八年（明治三一）二世を襲名。大きなやわらかい音色で、二世竹本春子太夫の相三味線をつとめた」¹²⁾

〈コメント〉

辻山：春子太夫と豊沢新左衛門の顔合わせ。二人とも恋愛物・心中物の「艶物」の名手なので義太夫の艶物としての「生写朝顔日記 宿屋」の魅力が堪能できる名盤だと思う。

5 思「鎌倉三代記・三浦別れの段」、豊竹つばめ太夫・豊沢仙糸、ビクター、52904A

★豊竹つばめ太夫：二世。後の八世竹本綱太夫。「一九〇四（明治三七）・一・三大阪——一九六九（昭和四四）・一・三同地 本名生田巖。初名竹本春尾。二世豊竹古靱太夫（山城少掾）門弟。二世豊竹つばめ太夫。四世織太夫を経て、一九四七年（昭和二二）八世襲名。五五年に重要無形文化財に認定された」¹³⁾

★豊沢仙糸：四世。「一八七六（明治九）・四・二六大阪——一九四六（昭和二一）・四・一一 本名中井庄吉。六世豊沢広助門弟。初名豊沢小作。一八九三年（明治二六）に二世豊沢猿二（治）郎を、一九一四年（大正三）に四世を襲名。道行・景事、世話物を得意とした。」¹⁴⁾

〈コメント〉

辻山：豊竹つばめ太夫は後の綱太夫だけど、若い頃からしっかりとした語りをしていたということが分かる音源だね。綱太夫は「櫓下」になれず、戦争で苦勞した。豊沢仙糸がやわらかい音を出していてすごく良い感じの演奏になっている。電気吹込みで自分が好きな盤。豊沢仙糸は特に艶物の演奏での評価が高かった。

辻山：リストに出ている演奏者を見ただけで流行

り廃りが分かる。このリストにない演奏者がたくさんいることも。

飯塚：レコード会社は、ある程度最良がいてレコードが売れそうな演奏者でないとレコードを作らないということが、リストを作ってよく分かりました。

辻山：西宮に工場があったタイヘイレコードがそう。戦後、アメリカのマーキュリーレコード（社のレコード）を売っていた時は良かったけれど、マーキュリーが大手に取られてしまったら（自分の会社で販売できなくなって）ダメになった。

飯塚：レコード会社は売れたり売れなくなったりが激しくて、吸収合併が多いですね。

ここからは女義太夫を聴いた。

6 飯「三十三間堂（上）」、豊竹呂之助・豊沢仙平、リーガル、553、65046-A、80086

★豊竹呂之助：「明治三〇（一八九七）四・二二一？ 大正・昭和期の女義太夫。奈良県生まれ。本名は黒川キヨ。（中略）六代豊沢広助や六代鶴沢友次郎に師事、美貌と美声で昭和三〇年代まで活躍した。四八年因協会へ退会届を提出している。」¹⁵⁾

★豊沢仙平：「一八九二（明治二五）・一〇・五——一九八六（昭和六一）・二・一三 女義太夫。豊沢小住、豊竹小仙、豊竹団司らとともに近代における大阪女義太夫界を代表する第一人者の一人」¹⁶⁾

〈コメント〉

辻山：（呂之助には）当時「どーする連」というような追っかけがいたと言うが、女義太夫の美声でアイドル的な魅力が十分に感じられる。聴いているだけで踊り出したくなる。

飯塚：この盤はリーガルだからニッポノホンよりは後（の時代のもの）。昭和の最初くらいではないですか？ 舞踊レコードをリーガルは多く出していた。梶山の卒業生から盤をもらう時に「義太夫のレコードは父が自分の趣味用に買った。私には

童謡のレコードを買ってくれた」と言っていたのを思い出します。

尾張藩の御用商人であった家には、今でもまだ続いている家がいくつもあり、その中には自分で三味線を弾く「旦那衆」の方もおられます。そうした方々も名古屋の芸能を支えています。

7 飯「阿波の鳴門（一）」、豊竹昇之助・豊沢東重、ビクター、553、51126-A、780

★豊竹昇之助：「明治二三（一八九〇）一昭和四〇（一九六五）一一・一六 明治・大正期の女義太夫。大阪生まれ。本名は玄番よね。豊沢猿糸らに手ほどきを受けた後、豊竹呂昇の弟子となる。九歳のとき父が経営する大阪の寄席鞆館に姉の豊竹昇菊とコンビで初出座。明治三四年（一九〇一）男装で東京の寄席へ出演し、満都の絶賛を博した。舞台をしりぞいて家庭にはいったこともあるが、大正期には再出勤して女義太夫界を支えた。」¹⁷⁾

〈コメント〉

辻山：腹帯締めなくても語れる義太夫。歌謡曲的で、語りではなく歌になっている。義太夫で言えば「道行」の音程に合せているのではないか。飯塚：ビクターだから少し古い（盤）かもしれない。民謡のように聴こえますね。

8 飯「野崎村（三）」、竹本雛昇・昇歌（連れ弾）、サンデー、553、72-A

★竹本雛昇：「明治三八（一九〇五）一・一五一昭和五八（一九八三）一・二三 大正・昭和期の女義太夫。大阪生まれ。本名は三木里子。大正五年（一九一六）一〇歳で竹本敷島太夫に入門。その後四代竹本雛太夫に師事し、竹本雛昇を名のる。昭和初期には豊竹呂昇の再来と騒がれ、人気を博した。」¹⁸⁾

〈コメント〉

辻山：「連れ弾」というのは、女義太夫（ここでは雛昇）は普通、自分で語りつつ三味線を弾くが、さらにもう一人三味線を弾く者（ここでは昇歌）がいるということ。三味線は二の糸か三の糸を上げて高い音を出す。これはやっぱり語りというより歌だ。

飯塚：女義太夫というのは歌謡曲的なのですね。

辻山：こういうものが明治以降の大衆娯楽として出来てきたということだろう。

飯塚：風紀取り締まりの対象になったのもうなずける。かなりはやった（ものだ）からレコードも広まっていったのでしょう。

辻山：女義太夫は、名古屋では大須などで興行していたの？

飯塚：ほとんど大須に席がありました。落語や講談もみな大須にありました。碁盤割の商店街より一本南、距離にして500m離れていないが、商店街との間には明確な「結界」がありました。そこに遊郭があり、その横に芝居（小屋）もあるという盛り場の寄席だったのです。あまり風紀が悪いということで、遊郭の一つ、旭遊郭は名古屋の中村へ移された。そういう場所での興行でした。

辻山：大阪でも寄席は大阪の南の果て、焼き場や極門台があった千日前にあった。

飯塚：でも、そういう場所は意外と交通の便が悪くないんですよね。そして戦後、それらが取り潰されてターミナルなどが作られていくことになるわけです。

四 まとめ

SPレコードコレクター辻山幸一氏は、レコードをコレクションするだけでなく、戦前の様々な伝統芸能、特に大阪を中心とする関西の伝統芸能に実際に触れ、関わることにより、その担い手について豊富な知識を有しておられる。例えば文中にも挙げたが竹本津太夫と豊竹山城少掾の「近代淨瑠璃」前後のうたい方の比較などは、多くの

SPレコードを聴いてこられた氏の御意見として、近世・近代の芸能史・音楽史研究者の方々に精査していただきたい内容である。これからこのような伝統芸能に関わる方や鑑賞者などの周辺の方々の「生きた」声を収集し、残していくことが、伝統芸能の研究を進める上で重要なことだと認識している。

注

- 1) 辻山幸一・大山範子・飯塚恵理人「辻山幸一氏所蔵SPレコードコレクションに聴く上方芸の魅力」、新風書房「大阪春秋」180号（令和2年秋号）、P60-61、令和2年10月発行
- 2) 飯塚恵理人・大山範子・辻山幸一「辻山幸一新派を語る―神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き―」、椋山女学園大学文化情報学部「椋山女学園大学文化情報学部紀要」第20巻、P33-38、令和3年3月発行
- 3) 飯塚恵理人・大山範子・辻山幸一「続・辻山幸一新派を語る―神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き―」、椋山女学園大学文化情報学部「椋山女学園大学文化情報学部紀要」第21巻、P11-15、令和4年3月発行
- 4) 飯塚恵理人・大山範子・辻山幸一「神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き―その3『新内』を語る―」、椋山女学園大学文化情報学部「椋山女学園大学文化情報学部紀要」第22巻、P49-58、令和5年3月発行
- 5) 『日本古典文学大辞典』第二巻、日本古典文学大辞典編集委員会編、岩波書店、昭和59年1月発行、P140「義太夫節」
- 6) 『日本音楽大事典』、平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修、平凡社、平成元年3月発行、P679
- 7) 注6 P676
- 8) 注6 P701
- 9) 注6 P674-675
- 10) 注6 P701
- 11) 注6 P678
- 12) 注6 P701
- 13) 注6 P677
- 14) 注6 P701
- 15) 『日本芸能人名事典』、倉田喜弘・藤波隆之編著、三省堂、平成7年7月発行、P655
- 16) 注6 P701
- 17) 注15 P651
- 18) 注15 P554

謝辞

貴重な談話を下さいました辻山幸一氏に心より感謝申し上げます。会場を提供して下さいった神戸

女子大学古典芸能研究センターに感謝申し上げます。本研究は2023年度椋山女学園大学個人研究費（飯塚分）の成果の一部となります。

追記

辻山幸一氏は2023年10月7日に膵臓癌のため御逝去されました。この論文をお渡しできなかったのが心残りです。氏の御冥福をお祈りいたします。

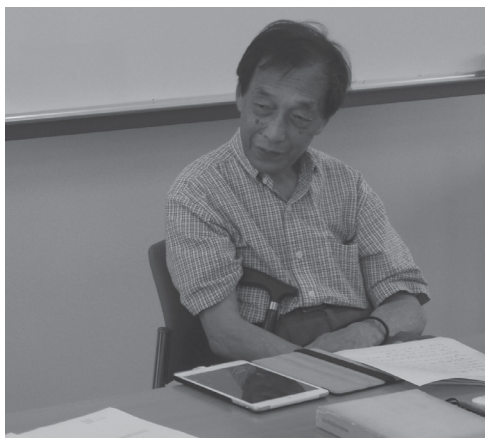


写真1 在りし日の辻山幸一氏



写真2 研究会の様子

いづか・えりと/文化情報学部教授

E-mail : erito@sugiyama-u.ac.jp

おおやま・のりこ/神戸女子大学古典芸能研究センター
非常勤講師

E-mail : ohyama@yg.kobe-wu.ac.jp

つじやま・こういち/レコードコレクター